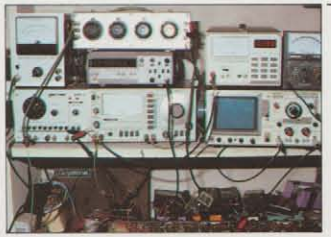
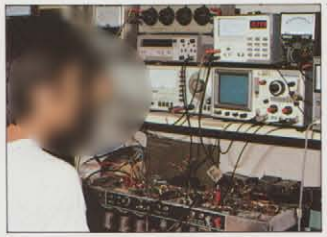
音の革新は流行のためではなく本質的に進歩のためにある。



開発の心臓部、測定機



最終チェックをする技術者。

スタジオで試作機の最終テスト。

私たちが楽器づくりを始めてから実に半世紀がたとうとしている。その間には、これまた実にうんざりするほどの流行が生まれ、消えていった。私たちはそれらの流行を、時には積極的に、時には消極的に、生みだし利用してきた。流行が私たちに恩恵を与え、恩恵が私たちに流行を作らせた。そしてまったく情ないことには、自分で作りだした流行に手ひどいしっぺ返しをくらったことも何度かあった。しかし幸いなことに私たちはやってこられたし、いまここに確かに存在し、さらにまた新しい半世紀に向かおうとしている。プレーヤーは私たちに何を求めてきたか、私たちはプレーヤーに何を求めてきたか、そして両者にとって流行とは何であったのか。

ここで流行のことを論ずるのは決して本旨ではない。このパンフレットはあくまでも私たちの作った製品を紹介し、理解してもらい、プレイする現場でお役に立てていただくためにある。しかし、流行に無縁であるほど私たちはマイナー・メーカーではないし、流行の効用といったことさえも少なからず認めている。また市場には常に流行があり、流行が新しい市場を形成するだろう。その意味で、流行を語ることを通して少なくとも私たちのメーカー・コンセプト「どう意志して楽器を作るか」ということをご理解いただけたらと思う。つまりそれを知ってもらうことが、私たちの意志表示を現実化した製品そのものを知ってもらう基本になるはずである。

さて、私たちは楽器メーカーである。メーカーは流行を作りだそうとし、ユーザーはそれに乗って流行は本格化する。しかしここで大事なことは、私たち楽器メーカーは決してインスタントラーメンを売っているわけではなく、楽器というハードウェアを売っているということである。ラーメンにおいて、味の改善あるいは変化といったものが流行の必要条件ではある。しかし楽器というハードウェア（とくに私たちの扱うエレクトロニクス楽器）においては（決して改善や変化ではなく）真の革新のみが流行の必要条件といえるのではないだろうか。つまり楽器を買うユーザーの方々はラーメンのユーザー（である時）に比べ、より慎重で、より鋭い感覚で、より革新↗

そして進歩は確かな技術と「よい音への執着」に支えられる。

的なものを選択する。そしてその革新が流行を生み、流行が拡大して全体で大きく前進する。メーカーもユーザーもそして時代も一体になって、革新を経験する。ただその革新は技術力・開発力によってのみ生みだされるものではなく、しっかりと未来をとらえる確かな眼と、なによりもよい音への情熱があって初めて生まれてくる。実はここに私たちの不変のメーカーコンセプトがある。つまり流行は私たちにとって意志的に選択したものではなく、うれしい結果として手に入ってきたものでしかない。流行は表面的な現象に過ぎず、裏ではアヒルの水かきさながらに「音への熱い執着」が常に燃えている。だから半世紀もやってこられた。そしてその意志が消えない限りまた新しい半世紀を作ることができることだろう……。ただ先にもいったように流行にも効用がある。エンジニアはライバルメーカーとの開発競争に良質の緊張を感じ（左頁の写真でエンジニアの日常の一端をご覧いただける）、販売セクションは激烈な市場での販売合戦によりおのずと活性化する。結果として全社がダイナミックに統一されて、市場にひとつのムーブメントをひきおこそうとする。これが全体に波及した時はじめて流行となる。そして大きく楽器業界全体で、互いに磨き磨かれ、革新が常に時代に提出され、時代はそれを承認する。かくして時代（という表現がオーバーなら音楽にかかわる全ての人々）は流行によって大きく前進する。というようなわけで、私たちは流行を決して否定しない。むしろユーザーと供に革新を共有できる流行というものを歓迎する……。さてさて、やや大仰に私たちのメーカー・コンセプトを語らせていただいたが、少しは理解してもらえただろうか。最終的には私たちの製品を具体的にお使いいただいて、具体的に判断していただく他はない。最後にユーザーの方々を代表して私たちの楽器を使っていただいているプロのミュージシャンにご登場いただいた（右頁の写真）。彼らのレコード及びライブを通しても私たちの製品を理解していただけることになると思う。では「熱い音」と「熱い感動」を求めて．熱い熱い私たちの製品をご覧下さい。

シルバースターズ

バウワウ

クリエーション

SINCE 1934

Best Quality For Best Sound

心臓がうち鳴らす規則的な鼓動　を無意識に　数えた瞬間から、人間は音楽しはじめたのかもしれない。

そうした「生きたリズム」を「熱いビート」を、どう表現し何をもって表現するか。ここに楽器が発生した人間的動機がある。

では「生きたリズム」や「熱いビート」を表現する「生きた楽器」とはどういうものか。

これが私たち楽器を作る者の、最初で最後の、そしてずっとずっと永遠のテーマだろう。

ロックのジャズのクラッシックの、あらゆる全てのミュージシャンたちが「生きた楽器」を追い求める。

そしておそらく「生きた楽器」とは、単純に「とてもよい音のする楽器」のこと。

そう思われた瞬間に、はじめて楽器は生命をもつ。はじめてミュージシャンと一体になる。はじめて完璧な道具になるだろう。

つまり「とてもよい音」のための「完璧な道具」。これが私たちの楽器に対する定義だ。

だからBEST QUALITY FOR BEST SOUND。半世紀前から、最初で最後の、そしてずっとずっと永遠の私たちのテーマである。